研究ノート

1960年代後半から1970年代前半における純潔教育・性教育実践
～札幌市立柏中学校を例として～

茂木輝順

1、はじめに

本稿で取り上げるのは、1960年代後半から1970年代前半における札幌市立柏中学校の性教育実践である。同校の性教育実践は、1960年代後半（1967年）から、継続的に続けられ、現在、同校は、性教育実践で、非常に有名な学校となっている[1]。

同校の前身は1931年開校の札幌市立第二高等小学校、1947年開校で、所在地は、札幌市中央区で、「通学区域は札幌市街中心部よりやや南にあり、その大部分は閑静な住宅地で(中略)学区内には交通量の多い二級国道が貫通していて、冬季オリンピック会場へ通ずる交通の要地でもある」[2]と説明される。

柏中学校の性教育実践の始まりのきっかけは、"生徒や卒業生の性的非行から同校に性教育の必要性がわきあがった"という自主的なものではなく、その逆であった。「性教育のとりくみの動機は、札幌市教育委員会からの研究委託にはじまる。しかし本校が性非行で問題を持っていたわけではない。むしろそうした性非行については皆無の学校なのである」[3]と説明されている[4]。1967年3月、柏中は札幌市教育委員会より突如受けた2年間の純潔教育研究の委嘱受け入れを決定した。

札幌市教育委員会がなぜ純潔教育の研究が必要となったのか、その理由は、次のように語られている。「冬季札幌オリンピックに来日する多くの外国人選手などとの間で女子中・高校生が性的トラブルを起すことが無いようにしたいとの考えがあった」[5]。柏中学校は、札幌市内の中学校の中でも、高校進学実績がかなり高いレベルの中学校であったようで[6]、性非行もなく、雰囲気の安定した学校であったために、市教育委員会が純潔教育の研究校に指定したと想像することができる。

おそらく、典型的な多くの学校は、研究指定校の期間が終了すると、研究熱が冷め、研究に携わった教員が異動するにつれ、実践も下火になるのだが、柏中の場合、40年以上、実践を積み重ね、このように長期にわたり性教育実践を継続している。このような公立中学は、おそらく日本で唯一である。

本稿では、現在までも続く性教育実践の礎がどのように作られたのか、その一端を明らかにするために、初期（1960年代後半から1970年代前半）の性教育実践に着目し、その特徴を整理し、考察する。

2、性教育の歴史的背景　－文部省の1940年代後半～60年代前半における純潔教育政策－

1960年代後半に始まる柏中学の性教育実践が、戦後の性教育史の中でどのような位置づけにあるのかを把握するために、文部省の1940年代後半～60年代前半における純潔教育政策について簡単に振り返っておきたい[7]。

1946年11月、終戦期に増加した私娼の対策として、次官会議によって「私娼の取締並びに発生の予防、及び保護対策」が決定され、その中で「2.『闇の女』発生防止及び保護対策」として「(3)子女の教育指導によって正しい男女間の交際の指導・性道徳の昂揚を図る」、「(4)正しい文化活動を助成して青年男女の健全な思想を涵養する」などの方針が掲げられた。これを受け、1947年1月、文部省社会教育局は各都道府県あてに「純潔教育の実施について」を通牒する。その備考には、「本

省に於いては近く純潔教育に関する権威ある委員会の設置運営をはかり、講師の養成、あわせて良書の選しょう、映画の製作をなす等の計画をもっている」とあり、この通牒に基づき、翌2月には純潔教育準備委員会、6月には文部省純潔教育委員会が組織され、第1回総会が開催されている。そして、委員会は論議の結果をまとめ、1948年2月「純潔教育基本要項」を発表する。その中で、「純潔教育の目標」は次のように掲げられている。「純潔教育は、単にいわゆる性教育の部面にとどまることなく、同時に一般道徳教育、公民教育、科学教育、芸能文化教育との連関において、およそ左の点に目標をおき綜合的に推進すること。(1) 社会の純化をはかり男女間の道徳を確立すること。(2) 正しい性科学知識を普及し、性道徳の高揚をはかること。(3) レクリエーションを奨励し、健全な心身の発達と明朗な環境をつくることに努めること。(4) 宗教、芸術、その他の文化を通じ、情操の陶冶、趣味の洗錬をはかること。」そして、学校教育に関しては「純潔教育をおこなう場所」の中に次のように示されている。「(3) 学校においては、この問題に関する教師の認識を高めるとともに、教育方法としては、特に純潔教育のみを取上げることなく、時宜にふれ、あるいは一般教科内容を通じて、直接この教育を浸透するように留意し、父母と先生の会、社会学級等を通じて、家庭、社会の教育に協力する。／なお、学校において、ホームルームを利用して教師と生徒の間に理解が高められ、生徒自身の間によき秩序と洗錬された気風がおのずから養われるように導くこと。」

この純潔教育基本要項発表により、純潔教育委員会は一応の目的を遂げたとされ、1950年4月、政令97号社会教育審議会令に基づき、純潔教育分科審議会へ改組される。審議会は1951年に青少年向けの読物として『男女の交際と礼儀』を発刊するなど、断続的に活動を続け、1955年3月、「純潔教育の普及徹底に関する建議 附・純潔教育の進め方(試案)」をまとめ、文部科学大臣に提出する。「この教育内容の重要性は、広く世人に認識され、普及徹底方に関する要望もとみに高まってきているにもかゝわらず、遺憾ながら実施に当面しての諸種の条件、即ち意義内容方法等に明確を欠き、且つ適切な資料等が得がたい等の関係から、今日まで行きなやみの状態におかれてきました」とその提出理由が説明されており、「純潔教育の正しい普及をはかるために、文部省は資料作製、研究集会の開催、実態調査、指導者の養成等を実施するよう措置されたい」あるいは「必要な予算を確保されたい」という要求も見られる。注目すべきは「『性教育』と『純潔教育』とは相違があるわけではない」、「純潔教育は、いわゆる封建的貞操観、道徳感、宗教的禁欲主義などの先入観のみによって行われることはのぞましくない」(下線は茂木による)と述べられているように、純潔教育に対しての“揺れ”が感じられる点であろう。また、「純潔教育の進め方(試案)」は、「そのまま成人教育のプログラムになるように組み立てられた」もので、「胎児期」「新生児期」「乳児期」「幼年期」「少年期」「青年期」の各時期において、両親の注意すべきことやこころがまえを解説している。この建議を受けた文部省は「純潔教育資料作成費」を予算化し、1959年から64年にかけて、以下の文部省社会教育局発行の青少年や保護者向けの読物資料を作成している。『男女の交際と礼儀』(1951年の改訂版、1959年)、『性と純潔－美しい青春のために－』(1959年)、『思春期までの子どもの指導』(1961年)、『男子と女性－若い人々のために－』(1962年)、『性についての正しい考え方、青少年の性に関する問題』(1964年)。

柏中の性教育実践は、このような文部省の純潔教育政策を経た後の1960年代後半に始められたのである。

3、実態調査

札幌冬季五輪が近づく中、突如2年間の純潔教育の研究指定校となった柏中は、第一年度(1967年度)を実践計画の立案・作成、第二年度(1968年度)を実践という予定で、研究をスタートさせる。

「全く、白紙の状態からの始まり」[8]であったと振り返られているように、教員のほとんどが、純潔教育・性教育に対しての知識も経験もなく、手探りの状態で研究が始まった。まず、1967年4月、校内に「純潔教育推進委員会」を発足させ、5月には、純潔教育分科審議会「純潔教育の普及徹底に関する建議」(1955年)を講読する学習会を開いている。そして、研究メンバーを資料収集班と実態調査班に分けて、実践計画作成の作業を進めていくことになり、資料収集班は、1965年に第1回全国純潔教育研究集会を開催した宇都宮市や、当時の学校性教育の権威であった間宮武(横浜国立大教授)らを訪ねている。

他方、実態調査班は7月、保護者[9]と翌年度柏中学校に入学を予定している小学生の保護者計400名を対象に「性に関する実態調査(第1回)」[10]を行ない、「家庭における性教育」などをきいている。この調査の回答状況の詳細は不明であるが、この調査によって、教師たちは、性教育に対して「かなりの父母の関心は高く(中略)ほとんどの父母が必要性を感じ」[11]ていることや、「家庭における指導上の問題としては、男の子の性教育に母親が困難を感じており、父親はあまり実際に性教育について参加していない」[12]ことを把握している。

さらに、生徒を対象に、7月に自由記述による悩み調査[13]を、9月に選択肢形式の悩み調査を、10月に2-3年生のみ対象の性的関心についての調査を実施している。教師たちはこれらの調査から、「生徒が持っている性の知識は友人関係から得ているものが多く」「両親から教わったというものが非常に少ない」こと、「性に対する関心は、身体の具体的機能やはたらきに対するものよりも、異性に対する感情的なはたらきが強い」こと、「関心が高まるピークは二年生であること」[14]などを把握している。

さらに、68年1月、第2回目の保護者対象の調査を実施している。この調査では、各クラス男女それぞれ10名ずつ計20名の保護者を無作為に抽出、全校で580名の保護者を対象として、「純潔教育の必要性」「男女交際の可否と限界」「家庭における純潔教育の留意点」「中学校での純潔教育への意見」などを質問している。例えば、「純潔教育の必要性」については、図1のような回答状況で、7～8割が学校での純潔教育の必要性を認めている。

教師たちは、「この調査を通じ、父母の学校における純潔教育への期待の大きさを再認識することができ、われわれが進めている、この研究と実践への自身をより深めることができた」[15]と受け止めている。その一方で、「この教育は本来家庭においてなされるべきものであるが、中学生の父母の多くが性をタブーとしてきた時代に教育をうけているといったところから自らによる指導をさけて、学校に依存するような実状である」[16]とも捉えている。

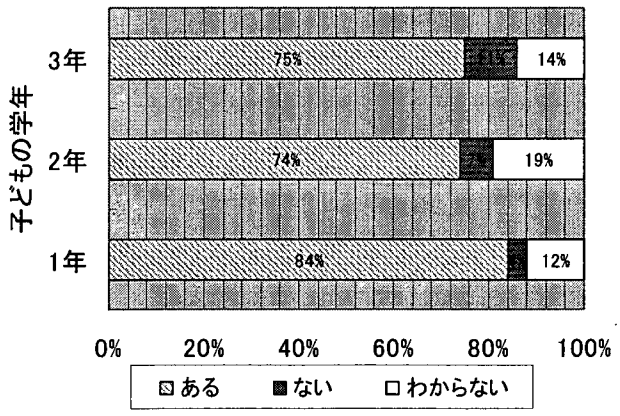

図1 保護者調査「学校で純潔教育を計画して行なう必要性」

4、指導計画の作成

以上のような資料収集、実態調査と並行し

て、教師たちは「性教育の基礎理論の学習を深め、指導内容、指導計画の作製」[17]を進めていった。指導計画を作成するにあたって、次のような資料を参考にしたという。

(1)文部省社会教育審議会「純潔教育普及徹底に関する建議」1955 年、(2)間宮武・鈴木清『純潔指導』日本文化科学社 1954 年、(3)宇都宮市教育委員会『子どもたちの純潔指導』、(4)和歌山市立教育研究所『中学校における純潔教育』1963～65 年版、(5)神奈川県教育委員会「純潔教育第一集実態調査報告書」[18]。

また、「実態調査の結果、本校の生徒の場合は、性意識については、異性との身体的差異についての関心よりも、異性に対するあこがれが強くめばえていることがはっきりした」などから、「異性に対する関心のめばえを素直にのばすことを基礎にして、生徒の性に対する疑問や不安を解決させ、男女の平等と尊敬の中から愛情をもって互いに協力していく素地を培うとともに男女の身体的差異による生理的、医学的な正しい性知識をもたせるため」、また、「身体の発達とともにめざめた性の変化に気持ちが集中することをさけ、人間としての豊かな生活がおくれるようにするために」、性教育の学校目標は次の 2 点に決定された[19]。

・男女間の道徳の確立をはかる
・性の昇華をはかって各種の情操を高める

そして、各学年の目標は次のとおりとされた[20]。

1 年生…からだの発達と男女の特性の理解を深める
2 年生…からだの変化と男女の役割を理解する
3 年生…純潔と男女の尊重について理解し、のぞましい態度を養う

これらの目標を達成するために、性教育の指導内容を、a…性的事象の理解、b…性に対する健全な態度の育成、という 2 分野に分け、具体的な指導内容を決めていった。計画作成過程において、「自慰」については、「学年会の段階で、この内容は指導が困難であるという多くの教師の意見が出され、本稿における性教育指導の内容から除外することにした」[21]という。そういった検討の結果、決定された学年別指導内容が表 1 である[22]。年間の指導時間は、1 年生…5 時間、2 年生…5 時間、3 年生…8 時間とされている。

実際の実践にあたっては、「指導内容を各指導者が分担をし、それぞれ作成した指導案を学年会、教科会で検討し、共通理解と共通意識のもとに指導がすすめられるようにして」[23]いった。

5、実践の特徴～実践記録から～

以上のような経過で作成された計画に基づいて、1968 年より本格的な実践が進められていった。その実践は、札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年に収録されている。その実践記録から、教師たちが中学生の性や性教育について、どのように捉えていたのか、教師の発言を中心に、その特徴をまとめると次のとおりである。

表1 学年別指導内容

	性的事象の理解	性に対する健全な態度の育成
1年生 (5時間)	・女子の身体的特徴(月経、乳房の隆起、発毛)(女子のみ) ・からだの発達(変声、にきび、体臭、筋肉、骨格) ・心の発達(大胆、勇敢、従順、小心、母性感情)	・性的事故と防止 ・男女の協力(相互理解、生活・学習面の協力) ・男女のからだと心 ・異性反発(暴力、ひやかし、いやがらせ) ・心身の鍛錬
2年生 (5時間)	・性のめばえ(男性ホルモン、女性ホルモン、その他のホルモン) ・二次性徴 ・夢精(男子のみ)	・性的異常行動(性的いたずら) ・男女の使命(男女のちがい) ・心の変化(不安、希望、反抗、焦燥、孤独、あこがれ) ・異性感情の台頭
3年生 (8時間)	・悪疾遺伝 ・性病(種類、感染、影響)(男女別) ・妊娠(出産、育児) ・性器と受胎(性器、精子、卵子、受胎、子宮、性器の大切さ)(女子のみ)	・不純な性行動 ・男女の交際(エチケット、文通、限界、目標) ・恋愛と友情 ・純潔(人間と動物の相違) ・性欲と種族保存 ・性的犯罪(誘惑の被害、防ぎ方)(男女別) ・外泊 ・幸福な結婚(結婚の変遷と男女、配偶者の選択、夫婦の協力)

1）　恋愛や男女交際

まず特徴的な点としてあげられるのが、中学生が特定の異性と交際することはもちろん、恋愛も望ましくないと考えられている点である。

例えば、「男女の交際」という授業では、「中学生の異性との交際は、異性を意識した友情としての交際であり、精神的にも肉体的にも、また経済的にも恋愛にまで育つことは無理なのです。」[24]と教師が説明している。ここでキーワードの１つとなっている経済力は、よく用いられていて、「恋愛と友情」という授業では、「まだ一人前の人間ではなく、義務教育をうけ、経済力のない皆さんにとっては、恋愛はまだで、そうした感情を正しく育てるための準備をする時なのだということになるわけです。(中略)恋愛を簡単に考え、お互いに人生の中に暗い、いやな思いや、理性を失ったために身体的にも傷を残すようなことになっては、その人の不幸はもちろんのこと、人間そのものに対する冒瀆といわなければなりませんね。」[25]という教師の発言がみられる。「不純な性行動」の授業では、男女交際や恋愛は「身体的にも傷を残す」契機とみなされ、精神的にも肉体的にも、また経済的にも未熟な中学生は避けるべきであり、「原則として、社会的に一対一の交際が認められるのは、経済的、肉体的、精神的にも責任をおえるようになってからです。」[26]と述べられている。

2）　男女の特性や役割

また、1年生や2年生の学年目標にもあるように、授業では、男女の特性や役割を理解させることに力点が置かれている。

例えば、「男女の役割」という授業では、「男女のちがいを通して、男女にはそれぞれ果たさなければならない役割のあることを理解させ、(中略)男として、女としてどうしなければならないかの自覚を持たせる」[27]ということが指導目標となっている。この授業で、教師は、「男女は身体上、精神上、その差異は認められるが、人間としての違いはない」[28]から、男女は平等であり、同権であると指導している。

また、「異性反発」を扱う授業では、クラスの男女が協力できず、反発する理由について、教師が「なぜ異性に反発してみたい気持ちになるのだろう。(生徒から「わからない」の声あり。)その原因はホルモンのはたらきによるのです。」[29]と説明している。このように、男女の特性や差異の原因がホルモンにあることが強調され、そのホルモンを学ぶ「性のめばえ」の授業では、「性ホルモンは男性・女性それぞれの形態をつくる大切なものです。睾丸の組織から分泌される男性ホルモンは、第二次性徴に関係し、身体的にも精神的にも男性的にします。卵巣は女性ホルモンを分泌し、卵子が育つように作用したり、お乳が出るように作用したりする大切なはたらきをします。」[30]と説明され、性ホルモンが身体的にはもちろん、精神的にも影響があるものだとされている。

また、こうして差異が生じる男女の特性により、「男らしい仕事」と「女らしい仕事」があるという。「心の変化」という授業では、「将来、男は父親として、女は母親としての役割を受け持つこと」になるから「したがって心の面でも、その特徴があらわれ、分化して発達してくるためです」[31]と、将来父親や母親になることも、男女の特性が生じる原因として説明されている。

3）　純潔と結婚生活

さらに、3年生の学年目標が「純潔と男女の尊重について理解し、のぞましい態度を養う」とされているように、3年生になると純潔や結婚の指導が行なわれている。

3年生の「純潔」という授業では、教師の問いかけによって、「男らしい職業」…「船員・自衛官・警官・パイロット・ガードマン」、「女

らしい職業」…「看護婦・保母・デザイナー・ウェイトレス・美容師・スチュワーデス」と、それぞれの職業がどんな男女の特性が要求されているかを、男性…「勇気・体力・決断力」、女性…「思いやり・優しさ・奉仕・忍耐・デリカシー」と生徒があげている[32]。この授業では、まとめに「1．男女それぞれの特性を認め合うこと。2.その特性の認め合いこそ、男女の人間関係をうまくいかせるもとであること。3.やがて結婚し、家庭人となるため、今から心構えをしっかりもつこと。4．でたらめな生活に陥ることなく心身ともに純潔であること。」[33]という要点が掲げられている。

さらに、卒業前の3月に3年生を対象として行なわれた「幸福な結婚」という授業は、学校長が担当し、次のように純潔の尊さを述べている。「一歩あやまって結婚前に純潔を失った人は肉体的な影響はもちろんのこと、精神的な面でも劣等感や罪悪感におそわれて、それ以後、ひとりで悩んだり、苦しんだりすることになります。(中略)純潔は幸福な結婚を実現するための、なによりも大切な前提と言われていますが、そのとおりです。」[34]

このように、男女の特性を理解し認め合うことで、男女の人間関係が純潔で良好なものとなり、その純潔の尊さが将来の幸福な結婚に繋がると指導されている。

6、実践後の生徒の反応

以上のような実践の結果、生徒には次のような効果や反応があったことが報告されている。

(1年生)「男女の仲がわだかまりなく明るく楽しい雰囲気がつくりだされた」[35]

(2年生)「異性間におけるいやがらせが少なくなり、そうした問題を建設的に解決しようとする態度がでてきた。」[36]

(3年生)「性をうけとめる姿勢が正しくなってきた。(中略)人間として当然知らなければならないこととして成長過程の中で正しく知ることの重要さを理解してきている。」[37]

また、3年生の感想文には

・「セックスは、あらゆるものの最も根源的なものだ。ぼくは、この学校で教えられたことを参考にして幸福な結婚をしたい。そして、生れてくるであろう子に、しっかりとした性に関する道徳をそなえさせたい。」[38]

・「いつも私たちが恥ずかしくて目をそむけていたような話ですが、いつまでも目をそむけているわけにはいかないのです。学校でこのような指導をすることは良いことだと思います。(中略)自分の気持ちをおさえて、「純潔」（精神的にも身体的にも）を守ってゆけば将来の幸福へとつながるものだということをはっきりしらされました。」[39]

と記されているように、「幸福な結婚」や「幸せな将来」と「セックス」や「純潔」とをしっかりと結びつけて考えるような姿がみられる。

7、おわりに

このような生徒の反応や効果を感じ、柏中学校は研究指定校の期間を終えた1969年以降も純潔教育・性教育の研究を自主研究として、40年以上も続けている。

このような柏中の初期の純潔教育・性教育実践の経緯と実践の特徴から、次のようなことが考察される

1)「純潔教育」か「性教育」か

まず、本稿で見た実践記録では、「性教育」も、「純潔教育」も、ほぼ同じような意味で用いられていることがわかる。しかしながら、同校が市教育委員会から委託を受けたのは純潔教育の研究であるという経緯や、性教育の学校目標・学年目標、指導内容からもわかるとおり、現在の意味で言えば、同校の実践内容は、性教育ではなく、純潔教育である。また、1976年時点での同校の性教育の学校目標・学年目標[40]も1968年のものと同じであることから、少なくとも1970年代前半まで、

同校の実践は純潔教育に位置付くと考えられる。

ところが、実践記録を、『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年として刊行していることなどから、「純潔教育」から「性教育」への名称の変化は、1970 年前後であると認められる。実は、1970 年前後に「純潔教育」から「性教育」へ名称を転換しているのは、柏中だけではなく、例えば、前田嘉明大阪大学教授らが 1966 年に設立した「関西純潔教育研究会（1970 年に「日本性教育研究会」に改称）や、『足立区小中学校における性教育調査結果の報告について』（1970 年の「純潔教育専門委員会」と 1971 年の「性教育専門委員会」による報告）など、全国的にいくつか見られる。つまり、柏中の事例から考えると、名称の変更から実践内容の変更に至るまでには、数年のタイムラグが生じると推測できる。

2）柏中の実践の特徴

また、柏中の実践では、恋愛や男女交際が危険視され、男女の特性や役割についての理解が求められるのは、将来の幸福な結婚のためであり、そのための純潔は必要不可欠なものと捉えられていた。

このような授業実践の組み立て方は、柏中も参考資料としてあげていた、宇都宮市教育委員会『子どもたちの純潔指導』や和歌山市立教育研究所『中学校における純潔教育』などとも類似しており、実践計画としては、必ずしも先進的とは言えない[41]。

以上のように、当時の柏中の実践は、先進的で突飛な実践というよりは、それまで他所で蓄積されてきた成果を加味しながら、時代や世相を非常によく反映した実践であると言えよう。そのような実践ゆえに、40 年以上、実践を積み重ね続けてこられたと言えそうだが、この点については、今後のさらなる調査によって明らかにしていきたい。

【註】

1 校内には「性教育資料室」という部屋があり、筆者は 2007 年 7 月、柏中学校に訪問し、この性教育資料室の資料を閲覧した。訪問にあたってご配慮いただいた鳥居正年(元・同校校長)先生、訪問を快く受けいれていただいた安田功一(当時)校長先生・林英雄(当時)教頭先生に、この場を借りて謝意を申し上げる。

2 札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.231

3 前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.17

4 逆に言えば、性的非行でもない限り、性教育は必要ないと考えるのが、当時では、一般的な認識だったということだろう。

5 広鰭浩平「研究懐古」柏中学校 OB・北海道性教育振興会『エッセイで綴る北性研・その 1 －柏中と性教育の想い出－』1999 年 p.3

6 Wikipedia「札幌市立柏中学校」「http://ja.wikipedia.org/wiki/札幌市立柏中学校」(2009 年 4 月アクセス)によると、柏中学校は「3K2F」と称された進学実績の高い中学校の一つであった。３Ｋ２Ｆとは、柏中学校のほか、札幌市立啓明中学校、札幌市立向陵中学校の頭文字 K と、札幌市立伏見中学校、北海道教育大学附属札幌中学校の頭文字 F。

7 この節の記述は、以下にあげる田代の先行研究を参考にした。

- 田代美江子「日本の性教育の歩み」(第 11 回～18 回)『季刊 Sexuality』16～26 号、2004～2006 年
- 田代美江子「戦後における「純潔教育」実践の展開―第 1 回全国純潔教育研究集会を中心に―」『教育学研究室紀要－＜教育とジェンダー＞研究』4 号、2001 年 pp.86-93

8坂本清「北性研の設立と初期の思い出」柏中学校 OB・北海道性教育振興会『エッセイで綴る北性研・その 1 －柏中と性教育の想い出－』1999 年 p.5

9 家庭の状況については次のように分析されている。「家庭の職業は、自衛官、郵政職員などの俸給生活者がその大部分を占めているが、幹部層の親が多い。父母の学歴は比較的高く、知的教養は平均している。したがって子どもの教育にはきわめて熱心である。／とも働き

の家庭は全体の九％であり、母子家庭は四％、父子家庭は０・二％であって、いずれも市内の平均よりは、はるかに低く、経済的には恵まれた中流家庭がほとんどである。」（札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.231-232）

10 保護者(翌年度柏中に入学を予定している小学生６年生の保護者を含む)対象に、性教育に関する講演会(内容は、医師による「家庭における性教育」として主に生理的側面の講話と教師による「子どもの周辺の性問題」として実例を通しての実態)を開催し、その講演出席者対象にアンケートを実施している。

11 前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.22

12 同上

13 質問は次のとおり「あなたが、現在、または今迄に経験したできごとの中で、人にうちあけにくいことがありましたら、具体的に（いつ、どこで、どんなこと）書いてください」

14前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.27-28

15 前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.256

16 前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.48

17前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.18

18前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.49-51

19前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.34-35

なお、これらの学校目標、学年目標は、1976 年まで変化がない（柏中学校 PTA・柏中学校『PTA 研修会要項―講演と教育を語る会―』1976 年 p.8）。若干の変化がみられ、3 年生の目標から「純潔」が消えたのが確認できるのは、1977 年である（北海道性教育研究会『第 6 回北海道性教育研究大会要項』1977 年、p27）。

20前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.35-37

21前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.20

22前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 pp.37-38 より作成

23前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.47

24前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.155

25前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.187

26前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.200

27前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.126

28前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.130

29前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.89

30前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.112

31前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.117

32前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.209

33前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.210

34前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.226

35前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.104

36前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.150

37前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.228

38前掲・札幌市立柏中学校『性教育の計画と実践 中学校編』明治図書 1970 年 p.230

39 同上

40 柏中学校 PTA・柏中学校『PTA 研修会要項―講演と教育を語る会―』1976 年 p.8

41 柏中の性教育実践の先進性については、広鰭浩平(1967 年当時柏中学校教諭・研究部長)も「日本の先進地、先進校を訪ね、お話を聞いて歩いたがいつのまにか、逆に柏中学校が先進校として広く国内に名をはせていた」と回顧している（広鰭浩平「純潔教育そして性教育」『北海道性教育研究会二十周年記念誌』1991 年 p.165）